

# メロン編

## 定植

つる枯れ病を防ぐため地表面よりポットの土の表面が少し出るように植える。鉢土が崩れて根が切れると著しく生育が遅れるので注意する。



## 誘引

ベランダなどでは垂直方向に誘引することでスペースを有効的に利用できる。通気性や受光態勢も良くなり、作業もし易くなる。



## 交配

12~16節の子づるの雌花3~4花を交配する。ベランダなどでは、着果を確実にするために写真のように人工授粉をするとうい。

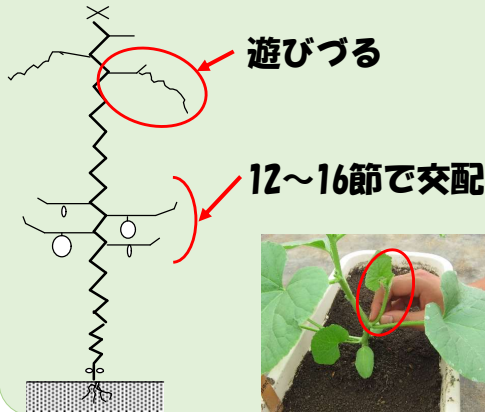


## 摘果

3~4果果実が肥大し鶏卵大になったら果形の良いものを1つ選び他のものは摘果する。



## 整枝



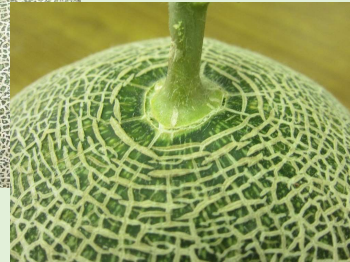
着果節以下の子づるは元から摘除する。20節前後で摘心する。基本的に遊びづるは不要だが、遊びづるを残す場合は、着果節以上の子づるは上位1~2本残り摘除する、残した子づるは1葉を残し、孫づる1~2本を残す。



## 収穫



Mg欠乏症状



離層

収穫適期は交配後45日~60日と幅広く、品種によって異なる。収穫の指標として果実の1節先の葉のMg欠乏症や果実の離層の発生がある。

## 病害虫



うどんこ病



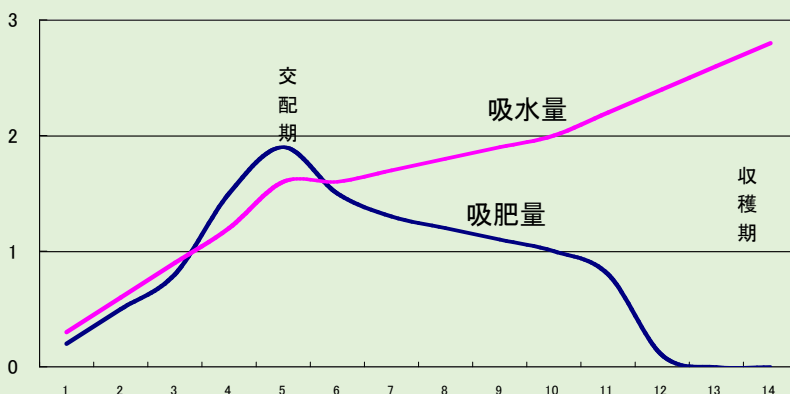
アブラムシ

乾燥した環境では、うどんこ病が発生しやすい。予防用の殺菌剤を生育初期に散布すると出にくくなる。メロンの栽培に適した5月頃はアブラムシが発生しやすい季節でもある。アブラムシはウイルス病を媒介するため、発見次第、適用のある殺虫剤等で防除する。

## 灌水・肥料

吸水量および吸肥量の推移概念図

吸収量(リットル/日・株)



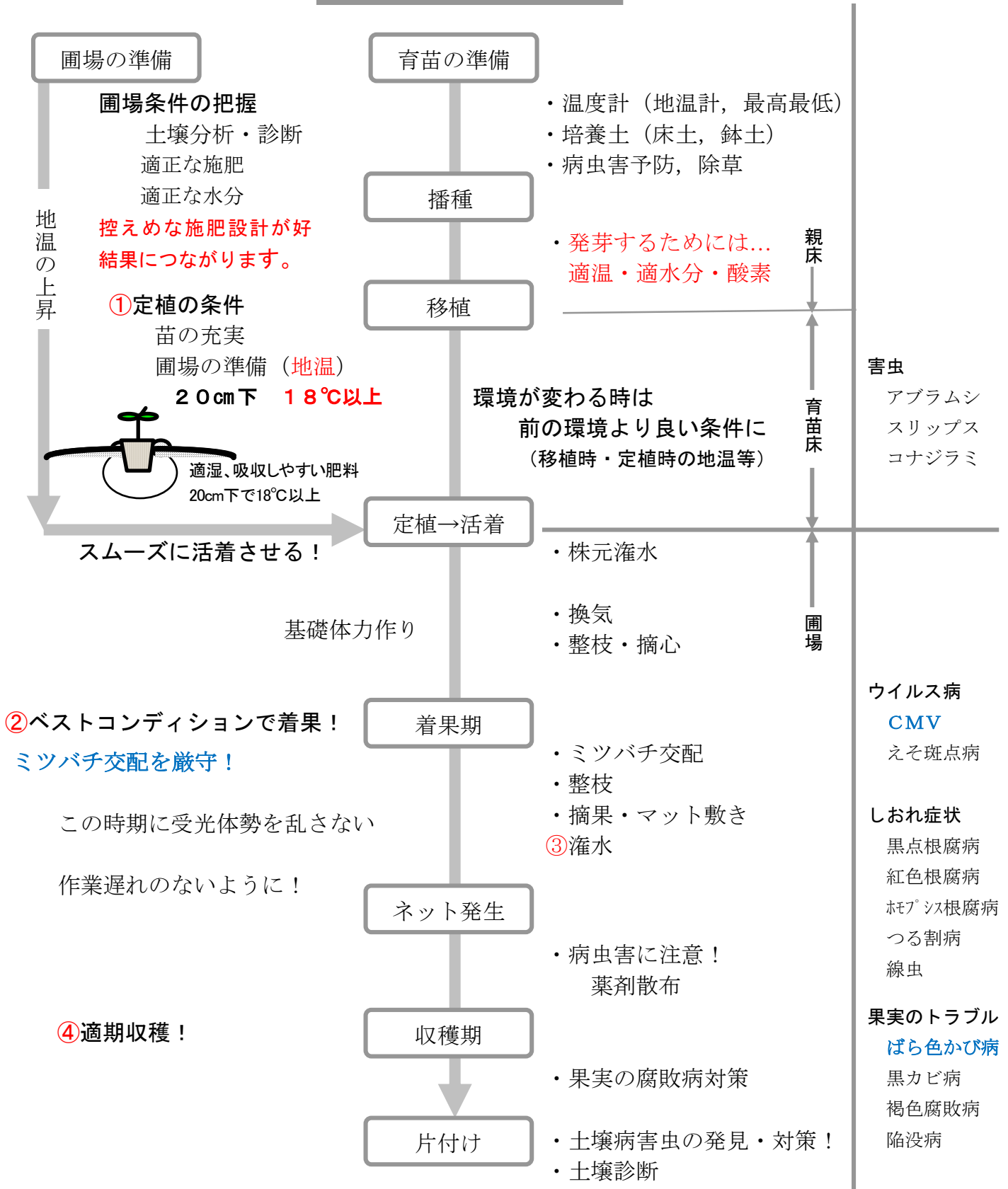
	N	P	K	Ca	Mg
株当り吸収量 (g) (1本仕立て, 1果成り)	4.4	1.6	6.8	9.3	1.2

「ハウスメロン 生理と栽培技術」より

大きいメロンを育てるには、交配後の水管理が重要である。交配後30日ほどで8割ほどの大きさが決定する。交配後は肥料をほとんど吸わないため追肥は不要。

吸水量及び吸肥量の推移(試験IV)  
(野菜茶試 池田 広)より参照

## ◆栽培の流れと要点◆



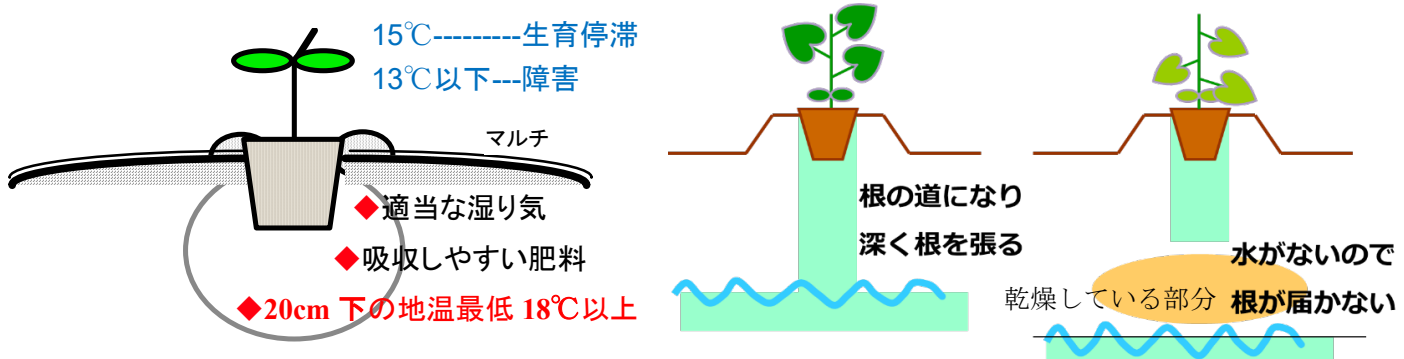
※メロン栽培において、主なトラブルの原因は、過剰施肥・低地温定植・灌水不足・若切り収穫です。

◆ 定植～活着～初期生育 ◆ 地温の確保と土壤水分

① 定植圃場の適性地温確保 (マルチフィルム下 20cm で 18℃以上)

< 定植に必要な条件は >

- \* 適当な土壤水分と適地温
- \* 苗は老化していないこと
- \* 定植時の株元灌水



※定植時の低地温、土壤水分不足により根張りが悪くなると雌花形成期 (本葉 6~7 枚展開期) に灌水することになり、結果として、雌花のとび・デベソ果など障害果の原因になります。

◆ 着果期：交配前～交配後 ◆

② ベストコンディションで適正な着果位置 (果実肥大が期待できるのは 13~16 節)

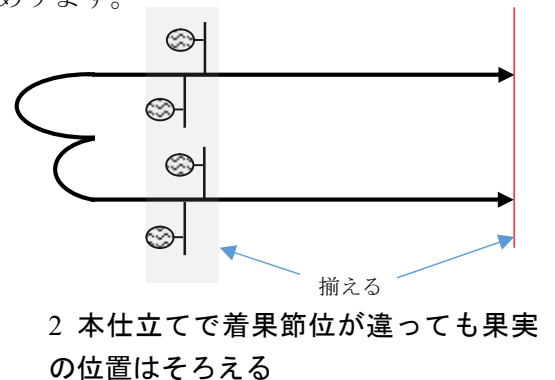
着果し肥大してくると、地下部 (根) の発達は二の次になり、子孫を残そうと種子に栄養を送ろうとして草勢が弱くなりやすいので、その前に地下部を充実させておく必要があります。

\* 着果位置を揃え一斉着果を心がける

着果スタートは、着果枝下に 10 枚以上の一人前の本葉がある位置からが良い。

\* 草勢の強弱判断は

つる先の立ち方 (角度)、巻きひげの勢い、着果枝の伸び方、溢液 (葉水) があるか等で分かります。



\* ミツバチを放飼するまでにする仕事は遅れずに済ませ、交配後の管理も適時・速やかにおこなう。

交配 (ミツバチ搬入) 後の管理

- 着果確認 \* 葉面積確保 ⇒ マルチ全体が葉で隠れる = 大玉 マルチが透けて見える = 小玉
- 整枝 ----- 着果枝より上位の孫づるは草勢の状況を観て先端の数本を残して摘除する
- 摘芯 ----- 1 蔓1果収穫で20枚。1蔓2果収穫で25枚の本葉が必要 (摘心して → 果実肥大)



順調な樹勢と着果枝 (立体栽培)



開花当日の着果枝 (20 cm以上)

\* 理想的な着果枝の長さは 23~25 cm ・状態によっては交配予定 5~7 日前くらいに少量灌水して調整する



◆ 摘果～灌水・フルーツマット敷き～果実肥大期～収穫期◆

葉を動かさない

③ 灌水・摘果-----花痕部の清掃とマット敷き

着果後はどれだけ果実肥大に専念させることができるかが重要。  
整枝・摘心・摘果・フルーツマット敷きの作業は、すみやかに。

着果後 2週間で収穫時の70%、  
3週間で80%  
4週間で90%まで肥大します。

この時期に土壤水分不足や、温度不足など肥大を抑制する要因があると十分な肥大は望めません。

必要十分な土壤水分と気温

外気の最低気温が15℃以上なら、夜間開放でOK

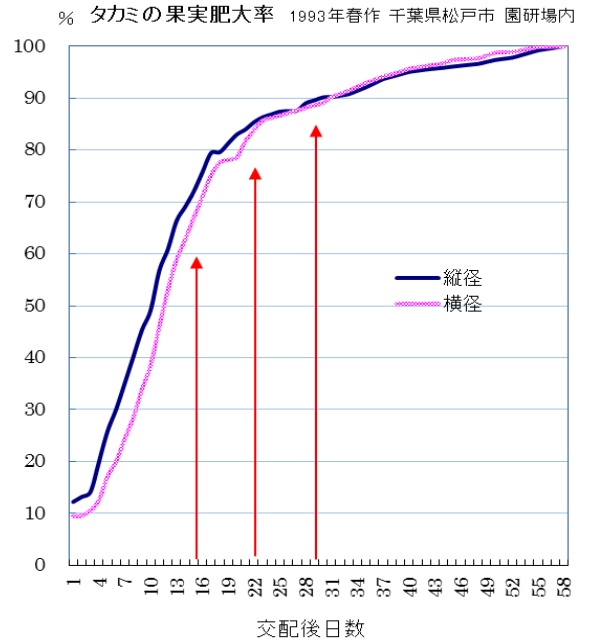
幼果裂果に注意しながら収穫の10~12日前まで灌水し、その後は灌水しない。



交配直後の灌水は幼果裂果の原因のひとつ



糖度が上がってくる時期は灌水終了後



◆ 受光体勢を乱さない◆

手入れ作業等は速やかに

アムス・タカミ等の緑皮メロンは肥大が短期間（着果～4週間）なので、その期間は葉が傾くような作業は行わないこと（わき芽かき、整枝等は早めの適期に行います）。



手入れが遅れ葉が傾いた状態



速やかな手入れで葉がしっかりと光を受けている

◆ 収穫 ◆

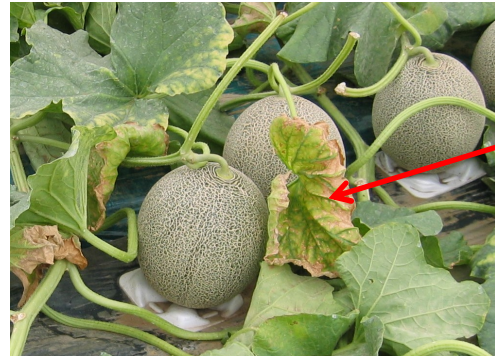
④ 適期収穫（高品質な果実を出荷することで消費者からの信頼が得られます）



糖度検査も重要ですが、実食した食味が大切です

適期収穫のポイントとは

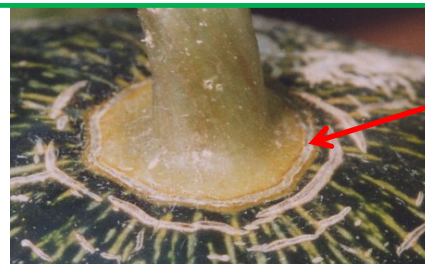
- ① 早切り・若切りしない
- ② 着果枝第1葉の色抜け
- ③ 着果からの日数を把握
- ④ 収穫サイン（離層）の発現を観察
- ⑤ 試し切り・試食をしてから収穫



色抜け



下右側の写真のように離層がはっきり出れば美味しいが店もちが短くなるので、左側のように離層部分が黄色くなったら試食を行なう



離層

◆ 出荷後のトラブルの原因はカビ ◆ 圃場と作業場の清浄化が重要です

- ・果肉が苦い
- ・カビが生えた、腐った

- ばら色かび病**
- 黒かび病**
- 褐色腐敗病**
- 陥没病**

**かび**による病気  
どこにでも存在する糸状菌  
植物残渣などで増殖  
ネットや傷口から侵入する  
適温：20～30℃

対策

1. 栽培中の定期的な殺菌剤散布と、収穫予定の4～7日前にも必ず適用殺菌剤を散布して菌密度を下げる。
2. 箱詰め作業所は清潔にし、古くなった絨毯やゴザは使用しない。
3. 高温期の収穫は早朝に行い、速やかに日陰に移動して、果実が高温にならない状態で箱詰め作業を行う。
4. 圃場での敷き藁は注意し、植物残渣は速やかに圃場に処分する。

